歴史探訪

「うつくしま」への系譜

燃える石に情熱を注いだ
石炭業開発の祖 片寄平蔵

白水阿弥陀堂にほど近い、いわき市内郷白水町にある「弥勒沢」は、常磐炭田発祥の地です。明治時代から昭和40年代にかけて、いわき地方は炭鉱と漁業を中心に栄えてきましたが、その石炭を弥勒沢で発見し、石炭業発展の礎を築いたのが片寄平蔵（1813～1860）です。

現在のいわき地方の発展を思うとき、決して忘れることができない石炭業。ここでは、みろく沢炭鉱資料館館主・渡辺為雄さんにお話を伺いながら、石炭に熱い想いを寄せ、その開発のさきがけとなった平蔵の足跡を振り返ってみました。

片寄平蔵　笠間藩領磐城郡大森村（現・いわき市四倉町大森）に生まれ、叔父利兵衛の養子となって、材木商を営む。安政2年、石炭の露頭を発見、本格的な採炭を行い、江戸に送って販売。幕府の御用にも応じるなど、いわき地方の石炭業発展の礎を築いた

明治35年頃の弥勒沢の現場　平蔵が石炭を発見した弥勒沢地内の炭鉱。ここは石炭の層が上りこう配になっており、坑外への石炭搬出も楽で、また自然排水も利用出来るなど、採掘には好条件に恵まれて大繁盛した所です。写真上部には職員住宅や飯場、長屋などがあり、当時のにぎやかさがしのばれます

弥勒沢の炭鉱跡地にある石炭の炭層露頭（みろく沢炭鉱資料館の館外展示）。この周辺では、地表から簡単に石炭が採掘できます

■新しい時代に向けた石炭発見

ときは幕末、アメリカのペリーが開国を迫ったのは、嘉永6年（1853）のことでした。ペリーが乗船してきた黒船を見た人々は驚きました。「平蔵もその一人でした。品川沖で黒い煙を吐く蒸気船を見て船火事と思い、聞いてみると『あの煙は船を走らせるために、石炭という黒い石をたいたものだ』と教えられて、さらに驚いたのです」と、渡辺さんは語ります。

いわきで材木商を営んでいた平蔵は、江戸の大商人・明石屋と取引をしており、このとき江戸に出ていた平蔵に石炭のことを教えたのも明石屋でした。これが平蔵の人生の転機となり、運命を方向づけたのです。平蔵はさらに、「石炭の火力はまきの比ではなく、もし石炭が産出する所を見つけたら国の富源ともなり、計り知れない利益を生むだろう」と、明石屋から聞くに及び、いわき地方に古くから伝わる風習を思い出しました。それは「くんのうこう」と呼ばれ、猪を追い払う野火に"燃える石"を用いるものです。あの石は、もしや石炭ではあるまいか。大きな国益と経済効果をもたらす新しいエネルギー源が、ほかならぬ古里にあるかもしれない――いわき地方に新たな可能性を広げる産業を開く志は、平蔵の胸中で熱く燃えさかったのです。

平蔵は夏井川の川岸を探索。拾った黒い小粒を火の中に入れてみると、異様な匂いとともに燃え始めました。これを見て、「上流のどこかに石炭があるはず」と川をさかのぼって探し、握りこぶしほどの炭塊を見つけて江戸に持参し、明石屋に見せたところ、「まさしく良質の石炭」と折り紙をつけられ、勇躍して帰郷しました。そして、さらに山まで行けば必ず石炭があると信じた平蔵は、安政2年（1855）、ついに弥勒沢で石炭を発見したのです。

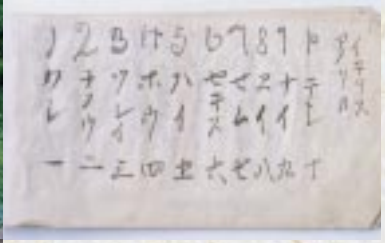
常磐炭砿磐城鉱業所跡（いわき市石炭・化石館）本州最大の規模を誇った常磐炭田の、現存する最大の抗口跡。かつては引き込み線（左手前）でトロッコに載せた石炭を運び、内郷駅から常磐線に載せて輸送されました

■石炭業を興し外国貿易にも尽力

平蔵は明石屋からの資金提供、今日で言うタイアップによって、翌年の安政3年に発掘を始めました。渡辺さんは「石炭は叺（わらむしろを二つ折りにして作った袋）に詰められ、馬の背に二俵つけて港に運送され、そこで船に積まれて江戸に送られ、販売されたと歴史にはあるようです」と話します。平蔵はさらに、安政4年には、石炭から油（コールタール）を造ることにも成功しています。このころ、江戸幕府は遅れた日本を新しい国にするため、品川に軍艦操練所をつくりました。幕府は安政5年、その軍艦に必要な石炭三千俵を買い上げると平蔵に言ってきました。この莫大な注文は、いわき地方の石炭業を活発にする大きなきっかけとなるものであり、平蔵は、幕府の注文にこたえるべく最善を尽くして無事に納炭し、この功を賞され、幕府から石炭御用の任を受けました。

次第に石炭商として、平蔵の名前が知れわたったころ、幕府は外国との貿易を横浜で行うことを決めました。すると平蔵は、石炭はもちろんのこと、いわき地方の特産物である和紙（上遠野和紙）や干しシイタケも外国へ輸出することにしました。石炭と一緒に江戸に搬送する雑貨類の輸送賃は安く、その利益は大きかったことでしょう。平蔵の商人としての手腕には、非凡なものがありました。そして何よりも、黒船襲来の外圧による経済の変革に、開国と攘夷論（外国人排斥運動）が対立し、波瀾万丈の時代に突入していた幕末のこの時期、身の危険を顧みずに、国難打破の外国貿易に真っ向から取り組んだ平蔵の姿勢は、まさに天晴れといえるでしょう。平蔵は新しい貿易の町、横浜のまちづくりにも尽力し、のちの横浜の商人たちは「開港の恩人」として、平蔵を神として祭っています。万延元年（1860）、平蔵は江戸で亡くなりました。

弥勒沢の炭層露頭を説明する渡辺さん。「この辺りは至るところにたくさんの抗口がありました」



片寄平蔵の手帳　平蔵はなかなかの研究熱心で、「横浜で外国人と取引するには英語が必要だ」と言って、小さな手帳に書き留めて暗記することに努力していました（いわき市平泉崎・光明寺蔵）

みろく沢炭鉱資料館の館内には、ツルハシ、カンテラ、保安帽などとともに、炭鉱の往時をしのばせる貴重な写真が多数展示してあります。渡辺さんは今年1月に、約6年の歳月をかけた労作「みろく沢炭鉱資料館写真集」を発行しました

■明日へと語り継ぎたいふる里の原点

「ここ弥勒沢に生まれ、炭鉱員として永年お世話になったわたしにとって、この資料館は最後の恩返しのようなものです」と渡辺さんは話します。常磐炭田発祥の地に建つ「みろく沢炭鉱資料館」は、元炭鉱員の渡辺さんが自宅付近に開設した手作りの資料館です。館内には、炭鉱で使われた工具類とともに、明治時代から閉山までの弥勒沢付近の炭鉱の様子や、活気ある炭鉱員の生活が記録された写真の数々が、大切に展示されています。「弥勒沢は、石炭の露頭（地表に表れた石炭）がたくさんありました」と渡辺さんは話します。館外の山の斜面に今も見られる黒い塊は、れっきとした石炭で、「総合的な学習の時間」で資料館を訪れる小学生たちに、渡辺さんは実際に石炭の発見を体験してもらっているそうです。「立派な石炭を発見した生徒を、『第二の片寄平蔵だ！』とほめると、子どもたちの目はとても輝くんですよ」と話す渡辺さんの笑顔が、とてもまぶしく感じられました。

平成13年5月、白水阿弥陀堂とみろく沢炭鉱資料館を結ぶ遊歩道「みろく沢石炭の道」が完成しました。これは内郷ふるさと振興協議会と周辺住民が協力して、自然を楽しみ地元の歴史にふれる道をつくろうと、看板の設置や草刈りをして整備したものです。いわきの近代を顧みる時、石炭を抜きにしては社会も文化も語れません。ふるさとの歴史を大切にしようという心がはぐくまれ、今のいわきのルーツを語ろうとした時、多くの人々がたどり着いたものが、常磐炭田であり、その発祥地・弥勒沢だったのでしょう。以前は白水阿弥陀堂にあった片寄平蔵の頌徳碑は、いまでは弥勒沢入り口に移され、建っています。「石炭のふる里」を安住の地としたその碑は、心のよりどころとなるふる里の原点を知り、明日へと伝えてゆくことの大切さを、わたしたちに、静かに語りかけているのかもしれません。

採炭の際に掘り出され捨てられた土砂や岩が積み重なってできたズリ山。最盛期のスケールを感じさせます（いわき市好間町中好間）

平成13年に「みろく沢石炭の道」が開通しました。これは、かつて人馬が石炭を担いで通った旧道を百年ぶりに復元した遊歩道で、開通当日は多くの市民でにぎわいました

片寄平蔵の墓（光明寺）　平蔵は江戸で没しましたが、自宅のある四倉町大森に埋葬され、のちに光明寺に改葬されました

片寄平蔵の頌徳碑　石炭発見の地・弥勒沢の入り口に建ち、その功徳を称えられています